もっといい明日が見えてくる－Letters from GNOBLE

Gno G-let

グノレット

vol.2

2010年10月発行

中学生・高校生の保護者の方へ

新高3生応援号

**Bodily exercise, when compulsory,
does no harm to the body;
but knowledge which is acquired under compulsion
obtains no hold on the mind.**

知の力を活かせる人に GNOBLE

GNOBLE（グノーブル）は、辞書に載っている言葉ではなく、
私たちの指導理念を現した造語です。
GNOは「知」を意味し、BLEは「力」を表します。
Oはまた、「輪（つながり）や和」を象徴しています。
10代の頃は、有機的につながった一定の知識を身につけ、
論理的に考え、外国語が使える力を培う大事な時期です。
それと同時に「人とのつながりを重んじること」も
大切なことだと私たちは考えています。

勉強最前線

～いま、教室で～

静かな白熱。ほとばしる知の興奮。
2010年度夏期講習高2α（最上位クラス）授業ルポ。
中山　伸幸（グノーブル代表・英語科）

おしえて！先輩

それまでの塾に見切りをつけてグノに転塾。
高3の1年間で、苦手の英語を克服しました。
山本　啓喜 くん（慶應医学部　筑駒出身）

ティーチャーズ・ボイス

楽しみながら英語力がつく。
そんな授業を支えるテキスト作り。
秋好　三成（英語科）

「こう解けばいいのか！」と必ず分かる。
数学の復習に欠かせない手書きプリント。
越川　将也（数学科）

カラダとココロのSOS

『勉強で疲れた頭と体を癒すアロマ入りバスソルト』
アロマセラピスト田中薫さん監修

勉強最前線

～いま、教室で～

高2α（最上位クラス）授業ルポ。

2010年度夏期講習

静かな白熱。ほとばしる知の興奮。

グノーブル代表 中山（なかやま） 伸幸（しんゆき）（英語科）

高２英語グノーブル最上位クラスの“夏”をレポート！

授業開始直後から、教室内には「コツコツ」とペンを走らせる音だけが響く。それはまさに『静かな白熱』という言葉が相応（ふさわ）しい濃密な時間だ。この日用意されていた演習問題は、英文要約、英訳、長文読解、文法理解などからなるプリント3枚。もちろん辞書の使用は不可で、これらの問題をわずか40分ほどで解かなくてはならない。授業前に「よろしければ、チャレンジしてみてください」と同じものを頂いたが、英米文学を専攻した杵柄（きねづか）もどこへやら、１枚目の要約もろくに手つかずのまま演習終了を告げる先生の声を聞いてしまった…。

（取材・文　吉村高廣）

要約に力を置くグノーブルの授業

グノーブルの英語では、要約をとても大事にしている。これには、過去数十年にわたって東大受験で出題されてきたこともあるが、むしろそれ以上に、筆者の意図を正しく捉え、それを第三者に正確に伝えることが学問の土台であり、また、英語は古今東西の人とつながれる『生きている言葉』の代表である、といった考えに基づいている。したがって、夏期講習でもここに多くの時間を割いていた。

演習中、頃合いを見計らって要約のプリントを回収し、中山先生は一人ひとりの解答を即座に添削をし始めた。授業は添削後に返却されたプリントと、先生の解説を照らし合わせながら進められるわけだが、この解説前の『添削』というひと手間があるからこそ生徒の理解は一段と深くなる。そしてまた、「大人数では、いい授業ができない」と常日頃から話している中山先生の言葉をここで初めて理解できた。先生は添削を行いながらすべての生徒の理解度や問題点を把握して、その日の授業の組み立てを考えていたのだ。また、集団授業でありながら、中山先生は一人ひとりの生徒としっかりつながっているのである。

『道草』が知の奥行きを深める

英文中に出てきた単語の語源をたどり、深く、正しく『言葉の意味』を知ることもグノーブルならではの大きな特長だろう。単語を成り立ちから解説されることで、生徒たちはその単語に関連した語彙を増やせるばかりでなく、言葉に対する知識を、興味津々深められる。効率的に授業を進めたい塾なら、カリキュラムから外れた『道草』とも考えるだろうが、むしろこの『道草』にこそ、大学受験で得点力を身につけるだけでなく、英語をもって世界に羽ばたく翼を備えるグノーブルの授業力の秘密が隠されているのだ。

また、知識の奥行きを深める『道草』は、単語の成り立ちだけにとどまらない。演習問題に関連した、人間の思考や心理について、あるいは天文学や考古学など、様々なジャンルに及び、巧みなたとえや具体例を交えての解説は、大人が聞いても実に楽しい。これまで取材してきたグノーブルの卒業生たちが「中山先生の授業はついていくのが大変だけど、ものすごく面白くてためになる」と口を揃えて話していた背景には、こうした『知の享受』があったからに違いない。卒業生同様、この日の生徒たちも真剣そのもの。誰もが顔を上げ食い入るように聞いていたのが印象的だった。

東大英語を「余裕」と言い切る授業の秘密

そもそも、中山先生には「授業を時間通り終わらせよう」といった考えがないのだろう。高2αの夏期講習は本来2時間授業であったが、授業開始から1時間以上が経過した時点で解説を終えたカリキュラムはおよそ3分の1程度。事前に「1時間ほど授業が延長になる場合もあります」と聞かされていたが、事実この日もその言葉通りになった。もちろん、のんびり授業を進めているわけではない。むしろその逆で、演習以降の解説は猛スピードで展開されるのだが、それでも時間が足りない。

授業前日の英字新聞。生きている話題に思わず引き込まれる。

英語のクラスは、α、α1、α2、α3の4レベルに分かれており、今回参加させていただいたのはその最上位にあたるαクラスのひとつ。当然ながら解説の速さも半端ではない。このスピードを支えるものが、英文を前から順に読みこなしていく力だ。グノーブルでは『返り読みをせず英文を語順通り理解する』ことと『音読を繰り返すことで英文を頭に馴染ませる』といった学習方法を習慣化させて、英文を速く、正しく読みこなせるよう日ごろから指導している。つまり、限りなくネイティブの思考回路に近い『英語脳』を養うことで英文をスラスラと読みこなしていくことができるようになるわけだ。

2010年春、東大に合格したグノーブルの卒業生をインタビューしたおり、ほとんどの卒業生がこんなふうに話していた。「東大英語は時間が足りないと聞いていたがそんなことはなかった。解答を見直す余裕もあった」と。なにしろ問題量が多く、スピーディーかつ正確に読み、聴き、書くことが求められる東大英語。これに誰もが苦しめられるわけだが、グノーブルの卒業生たちは「余裕があった」と言い切った。その言葉の裏付けはここにあるのだ。

先生と生徒の『熱意』の交換

演習時間と比較して問題数の多いこと、考え抜かれた教材の面白さ、息もつかせぬ授業スピードなど、今回の体験を通して驚かされることは多々あったが、何より痛感したのは中山先生の授業に向けた『熱意』だ。延長時間も含めておよそ3時間近くの授業であったが、その間先生は水を口にすることさえなく板書をし、話し続けた。これまでに話を聞いた多くの卒業生もそのパワフルさに驚嘆していたが、『聞きしに勝る』とはまさにこのこと。伝えるべきこと、伝えたいことが体中からあふれ出して、弾けんばかりの勢いで授業を進める姿に、最後まで疲れを見ることはなかった。

授業終了後、生徒たちの去った教室で先生はこんなことを話してくれた…「生徒たちの真剣な眼差しには、『もっと知りたい、もっと深く学びたい』という光が宿っています。そんな時、こちらのテンションが低かったり、少しでも手を抜こうものなら生徒たちにはすぐに見抜かれてしまうでしょう。大きな目標を持っている生徒たちに、常に100%の満足を与えるためには毎日が真剣勝負。気が抜けません。でも、実は生徒の熱い眼差しが私のパワーの源になっているんです」と。そんな中山先生に教えを仰ぐ生徒たちは、まだ高2の夏。これから先の成長が大いに楽しみだし、どれだけ力を付けるのか末恐ろしくもある。

演習に向かう生徒の背中から発せられるのは、まさに「静かな白熱」。

ティーチャーズ・ボイス Teachers'

教養を身につけながら「英語脳」を鍛える。そんな授業を支えるテキスト作り。

秋好（あきよし） 三成（みつなり）（英語科）

リベラルアーツとしての インフォメーションリテラシーを鍛える工夫。

グノーブルにくる生徒には、表面的な解説では飽き足りない、舌が肥えた『知的グルメ』が大勢います。そのため、テキスト作りをしている私も、旬のネタを上手にさばいて生徒たちの舌を満足させられる『職人』でなくてはなりません。

たとえば、先日ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の著書『ＪＵＳＴＩＣＥ』から着想を得て、高3のテキストで『正義』についての英文を扱ってみたのですが、予想通り反応は上々でした。中にはすでに、日本語の対訳本を読んでいる生徒もいて、サンデル教授の公開講座とまではいかないまでも『白熱した授業』になりました（笑）。

テキストにはもちろん大学入試の過去の問題なども入れますが、むしろ社会で起こっている問題や、いわゆるリベラルアーツとしてのインフォメーションリテラシーにも触れながら授業を行う方が生徒たちの知的好奇心は刺激されるはずだと考えています。それに応えつつ、英語力が向上できるテキスト作成が私たちに求められる課題です。

『ＪＵＳＴＩＣＥ』などは話題性が高く、一般的にも知られていますが、世の中にはあまり知られることのない書籍や文献にも参考にできるものはたくさんあります。こうしたものをいち早く察知して、自分なりの解釈を持つことがより良いテキスト作りの決め手となります。つまり、舌の肥えた生徒たちを満足させるためには、私自身が常に新しい知識を学び続けていかなくてはならないのです。

それでも時にはグルメの口に合わないこともあります（笑）。素材として使うには「ちょっと早すぎたかな」ということもあるのです。そのためテキスト作りは、こちらのネタ選びの目もさることながら、生徒たちの知的好奇心を見抜く目も鍛えなくてはならないのです。

多角的な視野を持った学生を大学は求めている。

大学受験塾の中には「過去の問題20年、25年分をしっかりやりましょう」ということに重点を置くこともあるようです。しかし、過去の問題をどれだけやったところでその問題は2度と出題されることはありません。もちろん受験ですので、目指す大学の出題傾向を知り、その対策を練ることは大前提。その上で、プラスアルファの知識を、高校時代に学ぶことがこれからますます大事になってきます。

またグノーブルでは、理系志望と文系志望を区別せず、理系の生徒であっても哲学や歴史を読んでもらいますし、文系の生徒にも宇宙論やiPS細胞などの話を読んでもらいます。つまり目指す学部に関連した話題ばかりに触れるのではなく、理系・文系の枠を越えて、あらゆる分野の知識を身につけてもらいたいと思うのです。

これは大学が求める生徒の人材像にも反映されており、理系だからといって科学や医学に関連したテーマを出題する大学は極めて少なくなってきています。「専門的なことは入学してから学べばいい。むしろ、より多角的な視野を持った学生であってほしい」。そんな気運の現れではないでしょうか。東京大学などは、まさしくその良い例といえるでしょう。

また、ひとえにインフォメーションリテラシーとはいっても、テキストで扱うテーマの中には複雑な事象を扱ったものもあります。しかし、それに対する背景的な知識があろうがなかろうが、私たち先生が噛み砕いて分かりやすく解説し、理解してもらうことが肝心です。いわゆるテキストの質と先生の力量が釣り合って初めて、インフォメーションリテラシーを軸とした授業は成立するのです。こうした中で生徒たちが、「そうか、こういうことだったのか」と納得でき、社会を俯瞰的に見られるような幅広い知識を身につけ、新しい発見をしてくれたら嬉しいと思います。

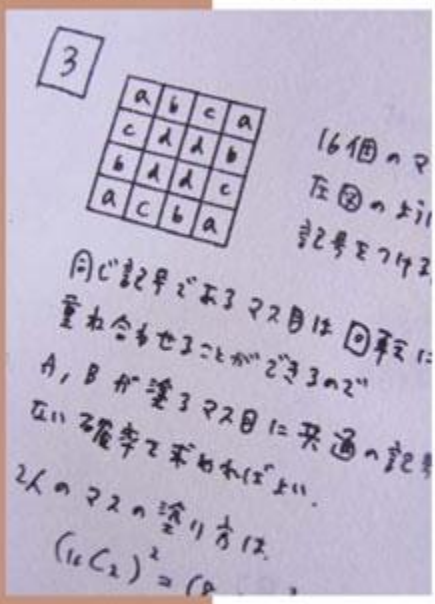
リベラルアーツ：人文科学、自然科学、社会科学を包括する一般教養
インフォメーションリテラシー：情報を理解し、効果的に活用する能力

「こう解けばいいのか！」と必ず分かる。数学の復習に欠かせない手書きプリント。

解法のディテールは、オリジナルのプリントで解説。

高3の9月以降の演習問題については答案用紙に解法を書いてもらい、それを一旦回収して翌週に添削して返却しますが、問題の解説自体はその場で行います。しかし、高3くらいになってくると全ての途中経緯を板書しながら解説していたのではとても終わりません。そこで1年間を通して、授業で解説する問題については、細かい途中計算も含めて一通りの解法が理解できるよう手書きのプリントを作って配るようにしたのです。

授業中の解説というのは、問題を解く上での着眼点や戦略の立て方がメインになり、細かい途中計算などについては、クラスレベルにもよりますが、あまり触れることはありません。触れることはないけれど「触れてくれなきゃ困る」という生徒のために家庭学習用のプリントが必要になってくるわけです。



もちろん授業中に、問題を解くための着眼点を学ぶわけですから、そこから先はスムーズに解答を導き出すことができると思われるでしょうが、家に帰っていざ問題を解いてみようと思っても、数学が苦手な生徒は途中で分からなくなってしまう場合が多々あります。着眼点などを学んだとしても、細かい式変形などでつまずくんです。数学は、1つのつまずきが次のステップに大きく影響してしまう教科で、1つが分からなければ、それ以降の全てが分からなくなるということにもなりかねません。

また、着眼点の解説さえすれば、あるいはそれすらも必要なく自らの力で解答を導き出す生徒も大勢います。そうした生徒にしてみれば、その都度授業を止めて分からない生徒のために多くの時間を割かれては、当然その間はやることもなく飽きてしまいます。そうした授業のマイナス要素を防ぐためにも、解法の手順から細かい途中計算に至るまで記されたプリントが必要なのです。

つまずく所を予測して、いつもの言葉で解説する。

こうしたプリントが「あって本当に良かった」と言ってくれる生徒の多くは、『細かい途中計算を正しくできない』という傾向があるようです。授業中に説明を受けて頭では理解したつもりでも、実際に問題に取り組み始めて分からなくなってしまうのはこうしたパターンが圧倒的です。

市販されている参考書や問題集などでも、一通りの解法の筋道は説明されているけれど、その解説を読んでもぜんぜん意味が理解できない。そもそも何が書いてあるのか分からないという場合がけっこうあります。私の作っているプリントに限って言えば「まずそうしたことはありません」と断言できます。なぜなら、このプリントは演習問題を作るのと同時に作成するわけですが、「ここでつまずくだろうな」と予測できるところは少し長めに解説を加えてみたり、さらには、解説の表現は普段私が授業で使っている言葉で書いています。そのため生徒たちはプリントを見ながらでも、マンツーマンで解説されているような深い理解が得られるわけです。

時として答案用紙を見ると、まるで私自身が書いたかのような解答を見ることがあります。それはもう解法のアプローチだけでなく、文章を漢字にするところや、平仮名にするところの使い分けなど、私の表現を寸分たがわずコピーして何から何まで私と同じ。これぞまさしく『信頼の証』であると、私は解釈しています。「まなぶ」は「まねる」が語源と言われていますが、基本をしっかり身につけるのにはいいやり方だと思います。また、そうした答案用紙を見るたびにこちらも新たなやり甲斐が芽生えてくるのです。

おしえて！先輩

山本（やまもと）　啓喜（ひろき）くん（慶應医学部1年　筑駒出身）

**それまでの塾に
見切りをつけてグノに転塾。
高3の1年間で、苦手の英語を
克服しました。**

ギリギリのタイミングで転塾を決意。

何しろ英語が苦手だったんです。以前通っていた塾でもけっこう必死になって勉強していたのですが、全く成績が伸びなかった…かなり深刻な状況だったと思います。

高2の後半になって、さすがに「このままじゃマズイぞ」ということで、思い切って塾を変えることを考えました。受験までの最後の1年を託すわけですから、塾選びはかなり慎重になりました。そんな時、筑駒の同級生たちの間で話題になっていたのがグノーブルでした。その頃、グノーブルで英語を学べば「1ヶ月くらいで英文をスラスラ読めるようになる」といった神話めいたものを耳にしたんです。もちろん最初は信じられませんでしたよ。でもこのままでは『どうにもならない』ことが自分でも分かっていたので「ここはひとつグノーブルに賭けてみよう」と思い転塾を決意したんです。

ぜんぜん違ったグノーブルの勉強方法。

前の塾では、ただひたすらに板書を写し、1週間に150語以上の単語を覚えてテストをしたりと、そんなことの繰り返しでしたが、グノーブルの英語の授業は全く違いました。

英語での発想の仕方を教えていただけるので文法もすんなり理解できたし、単語はその言葉の語源まで遡って解説されるため自然と語彙を増やすことができました。また音声教材を使って復習をすることで英語への抵抗感がなくなりましたし、何より、英文を前から読みこなしていくというグノーブルならではの指導方法のおかげで、正しく速読ができるようになったことは、英語が苦手だった僕にとって大きな収穫だったと思います。そのおかげで受験勉強という枠を越えて英語が好きになったし、英文を読むこと自体が楽しくなった。そう思えるようになった途端、自分の中に英語がどんどん入って来るようになったのです。

プリントの徹底復習さえやればいい。

僕はグノーブルで学び始めて成績は急上昇しましたが、英語にかける時間は圧倒的に減らせました。その理由は、英語が好きになって勉強に対して前向きになれたからだと思っています。授業中でも「つまらないな」と思っていれば終りの時間ばかりが気になるし、その延長線上で自宅での復習にも身が入りません。以前の塾では、だらだらとカタチばかりの勉強をしていたために「やってるわりには、ぜんぜん出来ない」ということになっていたのだろうと、今さらながらに実感しています。つまり、英語の成績を伸ばすためには、英語を好きになることが大前提なのだと思います。

とくに自宅学習においては、グノーブルの場合は授業でやったプリントを徹底的に復習するだけで十分です。グノーブルの勉強方法と教材は、英語力を上げる最後の切り札。「英語は修復不可能」と思われていた僕が言うのだから間違いありません。

（取材・文：吉村高廣）

詳しいインタビュー内容は「Gno Tube」でご覧いただけます。
www.gnoble.com/gtube/

カラダとココロのSOS 第2回

勉強で疲れた頭と体を癒すアロマ入りバスソルト

人間の身体は、交感神経と副交感神経がバランスよく保たれることによって正しい営みがなされます。勉強中は交感神経が優位に傾いており、頭も体も緊張状態。勉強後には緊張をほぐして副交感神経の働きを活発化させ、衰弱した免疫力を回復しておきたいものです。

そこでお勧めしたいのが、天然のあら塩とアロマオイルを混合した『バスソルト』入りのお風呂です。ただでさえ体温を上げてくれる入浴は、免疫力の向上に効果があるといわれますが、そこに体内の余分な水分と毒素を汗と一緒に流す効果のあるあら塩と、香りの成分が脳にアプローチして、精神的な安定効果を与えてくれるアロマオイルの力で、入浴の効果はより大きなものとなります。

バスソルトをつくる場合に使用したいアロマオイルは、柑橘系のオレンジスイートとハーブ系のローマンカモミールの2種類。どちらも、ほんのりと甘い香りが特徴で、入浴中、次第に気持ちが落ち着いていくのが実感できるはず。香りの合成成分が入った市販の入浴剤では得られない感動があります。

《バスソルトのつくり方》

（用意するもの）

・アロマオイル
（オレンジスイートとローマンカモミール）
・１００％天然あら塩

（つくり方）

1. ラップに３０gのあら塩を盛ります
2. あら塩の上にオレンジスイートとローマンカモミールを２滴ずつたらします
3. ラップを包み込みそのまま混ぜ合わせて出来上がり

免疫力を上げる入浴のしかた

免疫力を上げるために適したお湯の温度は『自分の体温からプラス5度』といわれていますが、個人的には数値で計るのではなく、自分の皮膚感覚で「ちょうどいい」と思える温度がベストだと思います。熱いお湯につかり過ぎれば、かえって交感神経が優位に傾いてしまい本末転倒。「ちょうどいい」か、むしろ「少しぬるいな」と感じるくらいのお湯にゆっくりつかり（額にじんわりと汗をかくくらい）、湯冷めしないうちに就寝することが疲れを残さぬポイントです。

英国ＩＦＡ認定アロマセラピスト　田中　薫

晴読雨読 この一冊

『打たれ強さの秘密』

タフな心をつくるメンタルトレーニング

岡本正善 著
青春新書（850円/税別）

優秀なスポーツ選手は、メンタル面の『セルフコントロール能力』が非常に高いといいます。たとえば、同じ技量を持った2人の選手がいたとして、一方はこの能力が高く、もう一方の選手はそこには及ばない。こうした場合、プレッシャーがかかる場面で活躍できるのは決まって前者の方だといいます。この『セルフコントロール能力』というのは、訓練次第で誰もがある程度は高めることができるもの。その訓練方法を分かりやすく教えてくれるのがこの本です。

2000年に初版が発行され、今に至るまで、累計20万部を越える大ベスト＆ロングセラーとなった本書ですが、その読者層はビジネスパーソンからスポーツ選手、さらには受験生に至るまで、「ここ一番」での実力発揮を求められる人々に幅広く読まれています。

編集後記

今回は『新高３生応援号』として、受験までの最後の１年に頼もしい情報を満載しました。すでにグノーブルで学んでいる生徒や保護者の皆さんは、今の勉強方法に対して確信を持っていただけたことと思います。また、塾選びに悩んでいる方々にとっては、グノーブルならではの魅力をご理解いただけたのではないでしょうか。

◆ 今回の表紙は、知の巨人・プラトンの肖像画です。英文に書かれている内容は『強制された身体の労働は、体に害を及ぼさないが、強制的に学ばされたものは心に残らない』というものです。

（編集責任：吉村高廣）

“英語を伸ばしたい”と願う人は、通う塾を選ぶ。グノーブルを選ぶ。

グノーブルなら、高3からでも遅くはない！
英語に対する苦手意識を自信に変えた卒業生たち。

難関大学に合格する生徒の誰もが、最初から英語が得意なわけではありません。高3になってからグノーブルで学び、わずか１年で自信をつけて成果を挙げた生徒も大勢います。今年、東大理Ⅰ合格の井本遥くん、東京医科歯科医学部合格の密田清夏さん、慶應医学部合格の竹田将人くんも、そんな仲間の一員でした。

中山クラスに入りたい！ それが英語のモチベーションでした。

兄が中山先生にお世話になり東大理Ⅰに進学したんです。そんな兄から、塾選びで悩んでいた時に「少人数制なら絶対グノーブル！」とアドバイスをもらいグノーブルに決めました。でも当初は成績が悪かったため中山先生のクラスに入れずに「何とか上がろう」と必死に勉強しました。ところが、ようやく中山先生のクラスに入ったと思ったら、今度は周りの人たちがあまりにもよく出来ることにビックリ…「上には上がいるもんだな」と、つくづく思い知らされました。でも、確かにプレッシャーはありましたが、むしろあのプレッシャーがなければ僕は伸びなかったと思います。

先生の姿勢に励まされて、英語の勉強が楽しくなりました。

苦手科目は英語でした。中学時代に入院したことがきっかけで、まったく分からなくなってしまったんです。「どうしよう」と悩んでいたところ、信頼できる桜蔭の友だちからグノーブルを紹介されたのです。グノーブルの先生は「教えてやってる」という上から目線はまったくなくて、「一緒に頑張ろう！」と向き合ってくださるんです。直前期には何年分もの過去問を全部添削していただき、考え方のアドバイスも詳しくワープロで打ってくださって本当に助かりました。授業で扱う英文もいつも面白く、「次はどんな内容だろう」と毎回楽しみにしていました。

脱！単語。熟語の丸暗記。そこからホントの力がつきました。

以前は、努力していたのに英語はほんとにダメでした。でも、グノーブルで学んで、英語に対する考え方や取り組み方が変わり、成績も上がりました。それまでの塾では、英語は受験科目のひとつに過ぎず、英単語や熟語を機械的に丸暗記する勉強方法で、それが普通のことだと思っていました。グノーブルに来てから、情報や考え方を伝え合う大切な道具が英語だと認識が変わり、英語の本質を捉えられるようになりました。いつのまにか英語の読み書きが楽しくなって、苦手意識もなくなり、全教科で点が取れるようになったことが、受験に向けて大きな自信になりました。

GnoTube GNOBLEをYouTubeで体験できます
どんな先生がいるんだろう？ どんな授業をするんだろう？
グノーブルは何が違うんだろう？
グノーブル流“学びのポイント”続々YouTubeにアップ中！
www.gnoble.com/gtube/

新高3説明会 対象 現高2生
場所：新宿本館（予約不要・無料）
11/3(祝) 11/14(日) 11/23(祝) 12/5(日) 12/12(日)
すべて10:30～

冬期講習説明会 対象 現中1～高1生
場所：新宿本館（予約不要・無料）
11/3(祝) 11/14(日) 11/23(祝)
すべて10:30～

2010年 大学受験合格実績 第4期 在籍307名

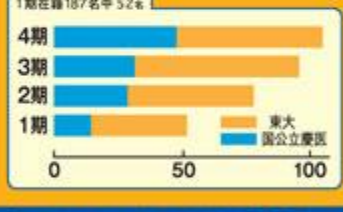
東京大学各科類

理科Ⅰ類	18名
理科Ⅱ類	5名
理科Ⅲ類	2名
文科Ⅰ類	12名
文科Ⅱ類	7名
文科Ⅲ類	10名
一橋大	15名
東工大	9名
東外語大	7名

東京大	54名
国公立慶医	48名
早慶上智	328名
私立大医	69名

東京医科歯科大(医)	5名
東北大(医)	1名
千葉大(医)	2名
筑波大(医)	5名
群馬大(医)	3名
慶應大(医)	6名
東京慈恵医大(医)	13名
日本医大(医)	9名
順天堂大(医)	8名
東京医科大(医)	4名
早稲田大	133名
慶應大	149名
上智大	46名
東京理科大	30名

東大＋国公立慶医 合格実績
4期在籍307名中102名
3期在籍271名中96名
2期在籍232名中78名
1期在籍187名中52名



なぜ、グノーブルでは英語を伸ばせるのか!?
独自メソッドのエッセンス！
全国有名書店にて好評発売中！
PHP研究所
価格：1,575円（税込）

新宿本館・受付

〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿OSビル1F
お問い合わせ
03-5371-5487
交通：JR新宿サザンテラス口徒歩1分
JR代々木北口徒歩5分
受付時間：月～金曜日15：30～21：00
土曜日14：00～21：00
日曜日 休み

渋谷本館・受付

〒150-0043 渋谷区道玄坂1-9-4 ODAビルディング2F
お問い合わせ
03-5459-7805
交通：JR渋谷西口 徒歩2分
受付時間：月～金曜日15：30～21：00
土曜日14：00～21：00
日曜日 休み

2010年4月、旧渋谷教室から、より良い立地環境に移転しました。開講学年・科目も格段に増え、受付も開設！

【2010年度 開講科目】(中1・2) 英・数 (中3) 英・数・国 (高1) 英・数・古 (高2) 英・数・現・古 (高3) 英・数・国・小論

知の力を活かせる人に…
東大・医学部・早慶 難関大学の受験指導
GNOBLE
グノーブルにアクセス。東大にアクセス。
www.gnoble.co.jp